

3. 東京湾沿岸域千葉県側の水と緑の関係

表-2に対象エリア全域と海岸線から5km以内の沿岸域についての緑地割合を示した。これにより沿岸域に都市公園等（都市公園と緩衝緑地等）が多くあることがわかる。図-4に河川から100m以内における都市公園等、また地域制緑地について、各自治体内の割合を示した。市原、習志野において、都市公園等が比較的高い割合で河川沿いに配置されていることがわかる。習志野では地域制緑地より都市公園等が多く、河川沿いが利用空間となっているといえる。

4. 千葉県モデルの提案

対象エリアにおける空間形成の実態を明らかにし、整理した結果、特筆すべき点として、河川が多くあること、横水路が存在すること、工業用地の中にもアクセスポイントが存在することの3点があげられる。これらの特性を踏まえた上で、水と緑のネットワーク形成を考慮した千葉県モデルを以下に示す。

- ① 河川や横水路の多自然型水路化やリバーウォークの整備を施した上で再生・開放
- ② 公共の護岸区域、海浜公園・臨海公園・緑地等における沿岸ウォークの整備を施した上で湾岸を開放
- ③ アクセスポイントの先端に海の一里塚を整備し、埋立地の海を部分的に開放
- ④ アクセスラインの開放、海の一里塚、公園の整備を施した上で、民有地においても海辺の開放を模索

図-5に、河川、横水路を骨組みとして、緑地、重点地区、アクセスポイントのネットワーク化のイメージである千葉県モデルを示した。①である河川や横水路の多自然化とリバーウォーク、②の湾岸開放を目的とした沿岸（ハーバー）ウォーク、③④のアクセスポイントの部分的開放を目的とした海の一里塚を示している。このように多自然型で親水性が高い整備をすることにより、自然と都市が共存した都市構造を目指すと考え。さらに、多孔質の空間が形成されるように、石を設置することで、生物の産卵場の拡大により生物多様性に資することができる。

5. モデル地区における千葉県モデルの具体化

千葉県モデルを特定のモデル地区において詳細に検討を行った。対象地区として、谷津干潟地区、幕張地区、千葉中央区地区、市原地区を取り上げた。その一例として、工業用地が多い市原地区を図-6に示す。ここで注視すべき点は、養老川、横水路、アクセスポイ



図-6 市原地区

表-2 対象エリア内の緑地割合

	都市公園(%)	緩衝緑地等(%)	地域制緑地(%)
自治体全域	1.4	0.5	61.2
海岸線から5km	3.3	2.2	26.9

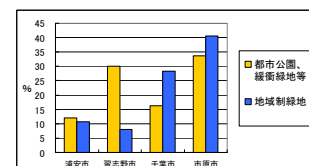


図-4 河川沿いの都市公園等、地域性緑地の割合

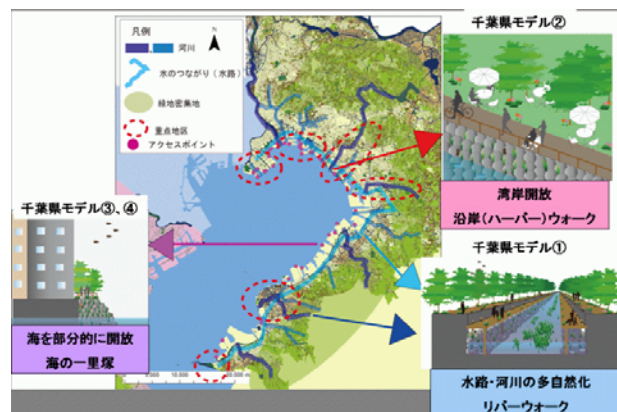


図-5 千葉県モデル

ント、内陸の自然、河川沿いの都市公園であり、工業用地にも関わらず水と緑のネットワーク形成に有効な要素が含まれていることである。これらを有効活用することで、水と緑のネットワーク形成の可能性が高まる。

6. 結論

東京湾沿岸域千葉県側において、現状を整理した結果、対象エリアには、河川が多くあること、横水路が存在すること、工業用地の海岸線形状も企業護岸であること、さらに埋立地内緑地が今後増加していくと推察できた。

また、水域と緑地をセットとして考えることで、沿岸域には都市公園や緩衝緑地等が多くあること。河川の周りには都市公園があり、緑地が利用空間として整備されていることが分かった。

これら特性から、水と緑のネットワークである千葉県モデルを提案した。またアクセスポイントや河川・横水路の整備方法を、拠点的、線的、両方の視点で提案した。

参考文献

- ・吉川勝秀：『流域都市論』、鹿島出版会、2008、
- ・Reiko SAINO, Mamoru MIYAMOTO and KATSUhide YOSHIKAWA、Evaluation and Development a Water and Greenery Network in Tokyo Bay Area Especially Chiba Prefecture、Environmental & Water Resources Institute of ASCE、2008